

# 小学校音楽科における音楽的思考を深める子供の育成 - 「生成の原理」に基づく音楽づくりの授業構想と実践 -

高度学校教育実践専攻  
教職実践力高度化コース  
櫻木希実子

実習責任教員 西村公孝  
実習指導教員 前田洋一

キーワード: 音楽づくり, 音楽的思考, 知覚・感受, 生成の原理

## 第1章 研究の目的と課題の設定

### 1 研究課題設定

#### (1) 研究課題の背景

##### ① 現代社会の変化

知識基盤社会, 予測困難な時代, 第4次産業革命, グローバル化などのキーワードから分かるように, 知識・情報・技能の加速度的な進歩や, 人工知能の判断, 多様性など世界の常識が変わりつつある。このような時代をしなやかに生きるために, 感性を働かせていくことがますます重要になってくる。

##### ② 音楽科による感性的認識の育成

西園(2017), 小島(2018)の芸術教科教育の見方を参照すると, 音楽科は感性教育に貢献できる特有の教科であることがわかる。感性とは, 世界を質的に感じる力であり, これからの社会を生きていく人間形成のために, 質的に感じる力と量的に感じる力をバランスよく育てることが不可欠である。そのために音楽科では, 質を扱うという音楽の本質をふまえた学力を育てる授業を行っていかねばならないと考える。

##### ③ 学習指導要領からみる音楽科学習の経緯

戦後, 試案として出された第1次学習指導要領の「豊かな人間性」という人間形成の精神は, 現在にも引き継がれている。第7次(平成10年)では, ゆとりの中で内容が削減され, 評価内容や方法が明確になった。第8次(平成20年)では, 表現と鑑賞の活動の支えとなる〔共通事項〕が

示されたこと, 言語活動の充実が重視されたことから, 音楽的思考の育成を目指す内容となっている。第9次(平成29年)では, 「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力, [共通事項]や, 「音楽的な見方・考え方」を働かせること, 「思考, 判断し, 表現する一連の過程を大切にした学習の充実を図ること」が示され, 音楽的思考の育成を重視していることが分かる。

#### (2) 音楽科の現状と課題

戦後, 音楽づくり分野学習が学校音楽教育に位置づけられ, 様々に実践研究が積み重ねられてきた。しかし, 各学校の音楽づくりの実施状況は, 歌唱・器楽, 鑑賞に比べて低調である。指導者の多くが音楽づくりの授業を経験していないことや, 具体的な子供の姿をイメージしにくいことなどから, 指導が難しく, 音楽づくりの授業が効果的に行われているとは言い難い。置籍校も例外ではない。筆者が附属中学校の研究授業に参加した際には, 小学校において, 中学校の学習を見据え, 音楽科の各内容分野を関連付けながら指導を行っていくことが必要であると感じた。

### 2 研究全体の構想

研究課題にある「音楽的思考」とは, 「音や音楽について知覚・感受したことを基盤として, 自分の表現したいイメージに合うように根拠をもって音や言葉等を選択したり組み合わせたりして, 演奏表現や作品(批評文を含む)をつく

るという一連の過程に働く思考」である。「音楽的思考」を深め、自分の思いを生き生きと表現できる子供の育成を目指すために、次の3つの点が重要であるとする。

- ① 発達に即したカリキュラム
- ② 生成の原理による単元構想
- ③ 個と集団の学びをつなぐ協同的な学び

上に挙げた3つの視点について、それぞれ仮説とその手立てを次に示す。

<p><b>仮説1【発達段階に即したカリキュラム】</b> 2・4・6学年の音楽づくりにおいて、「旋律」を指導内容として設定し、身に付けさせたい資質・能力を明確にすることによって、学びを進展させることができるだろう。</p>
<p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① (学習目標) 学びのつながりを見通し、子供の発達や生活経験・学習経験をもとに学習目標を設定する。</li> <li>② (指導内容) 学びのつながりを見通し、系統的に指導内容を設定する。</li> <li>③ (資質・能力) それぞれの学年において身に付けさせたい資質・能力を明確にもつ。</li> </ul>

<p><b>仮説2【生成の原理に基づく単元構成】</b> 「経験－分析－再経験－評価」の単元を構成、展開することにより、音楽的思考を深めることができるだろう。</p>
<p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 「経験」の場面において、子供が身構えることなく、これまで身につけてきた知識・技能を使ってできるような活動を行う。</li> <li>② 「分析」の場面において、比較聴取を行い、焦点化した指導内容についての知覚・感受ができるようにする。</li> <li>③ 「再経験」の場面において、「分析」の場面で得た知覚・感受を生かして、経験を進展させることができるようにする。さらに、創意工夫を生かす活動とする。</li> <li>④ 「評価」の場面において、「経験」と「再経験」の変化を振り返る場面を設定する。</li> </ul>

<p><b>仮説3【個と集団をつなぐ協同的な学び】</b> 子供が互恵的に関わり合う協同的な学びを充実させることによって、音楽的思考を深めることができるだろう。</p>
<p>手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 1人で考える場面、ペア・グループで考える場面、全体で交流する場面を設定し、個の学びと集団の学びを循環させる。</li> </ul>

## 第2章 実践研究の実際と分析

### 第1節 実践研究の計画と実際

#### 1 実践研究の計画

##### (1)ねらい

本実践研究のねらいは、これからの変化の激しい予測困難な時代をしなやかに生きていくための豊かな感性を育てることである。そのために、「感じる」力を軸にして、音楽的思考を深める音楽づくり分野の授業の実践を行う。

##### (2)実践計画

音楽づくり分野において、指導内容を「旋律」に焦点化し、低・中・高学年に段階的に内容を設定し、次のように実践計画を立てた。

2 学年（9～10月実施）

唱え歌をつくろう

指導事項：高い音・低い音による旋律づくり

4 学年（5～6月実施）

「さくらさくら」の音階から音楽をつくろう

指導事項：都節音階による旋律づくり

6 学年（6～7月実施）

循環コードから音楽をつくろう

指導事項：循環コードによる旋律づくり

【仮説1】については、指導内容を「旋律」に焦点を当て、低学年では「高い音・低い音」、中・高学年では「音の動き方」についての課題を設定した。このことが、それぞれの発達段階に合ったものであったか、学年が上がるに従って進展させられたかについて検証していく。

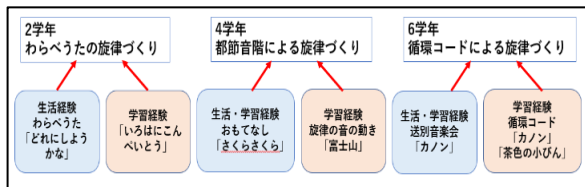
【仮説2】については、学習の4つの場面における手立てが子供の知覚・感受を進展させるものとなったか、子供の思考がどのように深まったかを授業記録などから検証していく。

【仮説3】については、思考の深まりや個と集団の学びを循環させる手立てとその有効性について検証していく。

### (3)実践のまとめ

#### 【仮説1】手立て①

子供の発達や生活経験・学習経験と関連付けて学習目標を設定した。



#### 【仮説1】手立て②

「旋律」の指導内容を、低、中、高学年へと螺旋的に発展させていくことをねらいとして、指導内容を設定した。

	2年	4年	6年
学習内容	わらべうたの旋律づくり	都節音階による旋律づくり	循環コードによる旋律づくり
内容・条件			
指導内容	旋律の音の高低 (使う音) 高い音(ラ)・低い音(ソ) (2音)	旋律の上行・下陸の音の動き ミ・ファ・ラ・シ・ド・ミ (6音)	旋律の上行・下陸・山型・谷型の音の動き 循環コードの構成音(ド〜ミ) I (Fメロ) IV (Fメロ) V (レノン) (各音ごとに異なる音が楽)
その他の条件			
リズム	等拍	4/4	4/4
小節数	指定なし	2小節	4小節

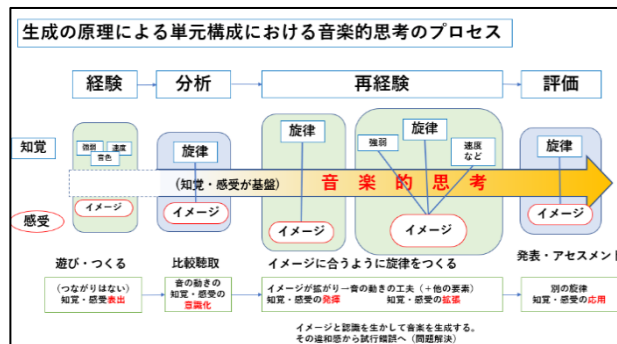
#### 【仮説1】手立て③

焦点化した指導内容について、2・4・6学年で身に付けさせたい資質・能力を次に示す。

観点	2年	4年	6年
知識・技能	言葉の抑揚を生かし、旋律の高い音・低い音を意識して旋律づくりができる。	都節音階の旋律の音の動き方について理解し、イメージが伝わるように旋律づくりができる。	循環コードによる旋律の音の動き方について理解し、イメージが伝わるように旋律づくりができる。
思考・判断・表現	旋律の高い音と低い音を知覚し、そこから生み出される特質を感じる。	都節音階の旋律の音の動き方から生み出される特質を知覚・感受する。都節音階の旋律の音の動き方を意識して、イメージが伝わるように表現を工夫する。	循環コードによる旋律の音の動き方を知覚し、そこから生み出される特質を・感受する。循環コードによる旋律の音の動き方を意識して、イメージが伝わるように表現を工夫する。
主体的に取り組む態度	旋律の高い音と低い音に関心をもち、意欲的に旋律づくりをする。	都節音階の旋律の音の動き方に関心をもち、意欲的に旋律づくりをする。	循環コードによる旋律の音の動き方に関心をもち、意欲的に旋律づくりをする。

【仮説2】2・4・6学年の3つの実践について、生成の原理に基づく単元構成の4つの場面

(①経験②分析③再経験④評価)ごとに、子供の音楽的思考の段階が、知覚・感受の【表出→意識化→発揮→拡張→応用】と発展していくことが分かった。



#### 【仮説3】個と集団をつなぐ協同的な学び

実践では、個で考える、ペアで考える、全体で話し合うの3つの学習形態をとった。仮説2で示した生成の原理に基づく単元構成で示した場面に当てはめ、整理した。

	形態	活動内容
経験	個	これまでの学習経験を生かして旋律をつくる
	ペア	旋律のつくり方を確認する
	全体	旋律のイメージについて話し合う
分析	個	自分の考え(知覚・感受)をまとめる活動
	全体	旋律のイメージについて話し合い、知覚・感受を深める
再経験	ペア	分析の場面で得た知覚・感受を生かして旋律を試行錯誤してつくる
	全体	表現の工夫(音の高低・動き、その他の工夫)を紹介する
	全体	表現の工夫(その他の工夫)を紹介する
評価	全体	つくった音楽を発表する
	個	自分の考え(知覚・感受)をまとめる

## 第2節 実践研究の分析

### 1 実践研究の成果

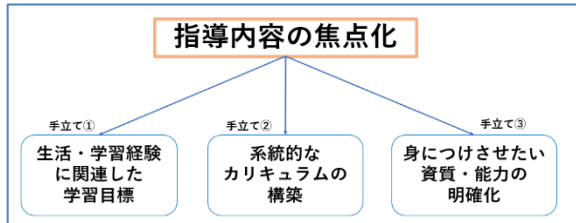
3つの仮説から実践研究の成果を述べる。

#### (1)【仮説1】の成果

発達段階に即したカリキュラムとするために、注力したことは、「指導内容を焦点化」したことである。このことにより、(学習目標)(指導内容)(資質・能力)に関する3つの手立てを講じることができた。

- ・生活経験や学習経験と関連させた学習目標とすることができた(手立て①)。

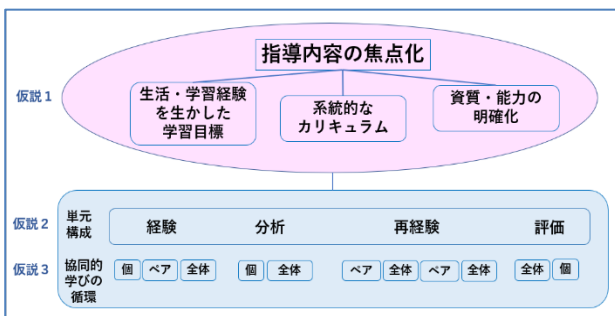
- ・学年ごとに系統的に指導内容を設定することができた（手立て②）。
- ・それぞれの学習において身に付けさせたい資質・能力を明確にすることができた（手立て③）。



本実践では、2・4・6学年の音楽づくりにおいて、指導内容を「旋律」に焦点化し、仮説1の3つの手立てを講じることにつなげた。そして、「旋律」の音の高低から音の動きへと、段階ごとに旋律についての資質・能力を身につけさせることができた。

## （2）【仮説2】と【仮説3】の成果

【仮説2】では、「経験—分析—再経験—評価」の単元を構成した。【仮説3】では、個、ペア・グループ、全体の3つの学習形態を活動の内容に応じて【仮説2】の単元構成に組み込んだ。このことにより、子供たちは知覚・感受を發展させ、音楽的思考を深めることができた。仮説1・2・3から見えてきたそれぞれの関係の図を次に示す。



## 2 実践研究の課題

### 【仮説1】の課題

子供たちの音楽的思考を広げ、深めていくカ

リキュラムについて2点の課題を挙げる。

- ・音楽づくりの分野における「旋律」についての学びを、他の分野・領域に関連付けること。
- ・旋律以外の指導内容についても、系統的に発達に即したカリキュラムを構築すること。

### 【仮説2】【仮説3】の課題

生成の原理による単元構成と、協同的な学びについて、さらに音楽的思考を深めていくために、次の3点の課題を挙げる。

- ・本実践で得た成果を音楽づくり以外の他分野・領域に生かすこと
- ・置籍校の「構え・自主・協同・発展の授業構成」と、「生成の原理に基づく単元構成（経験・分析・再経験・評価）」の関連を図ること
- ・置籍校の協同的な学びの概念と、本実践で得た個と集団の学びを循環させる協同的な学びの概念を関連付けること

## 3 幼小中連携教育への展望

本実践は、中学校の音楽づくりの授業を参観し、小学校からの学習の積み重ねの必要性を感じたことがきっかけとなった。そして、小学校音楽科の音楽づくりの分野において、旋律についての学びを螺旋的に發展させることをねらい、授業実践を行った。今後、幼から中へと範囲を広げ、学びのつながる実践を行っていきたい。

（参考文献）

- ・日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社、2017年
- ・小島律子『三訂版小学校音楽科の学習指導-生成の原理による授業デザイン-』廣済堂あかつき、2018年
- ・長島真人(2014)「音楽によって育まれる生きる力 音楽科教育の本質と可能性を問い直す」広島大学附属小学校 教育研究会『学校教育』No. 1165 (9月号), p. 6
- ・平成 29・30・令和元年度京都府小学校教育研究会音楽科研究大会『研究資料・学習指導案集』2019年